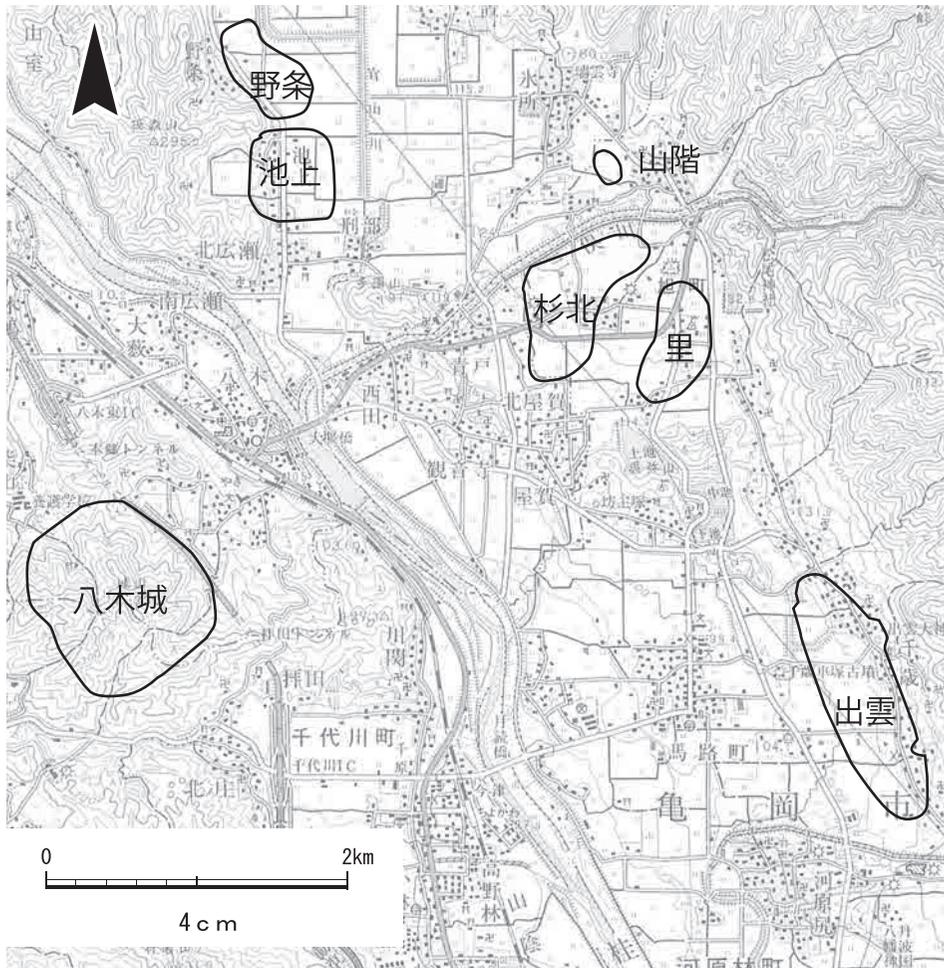


中世亀岡盆地北部における土師器皿の様相

武本典子

1. 亀岡北部の中世遺跡の土師器皿

亀岡盆地内の中世遺跡では土師器皿の底部に注目してみると平安京で使用された手づくねのものと、主に丹後地域で主流であった底部が糸切りされているもの二種類あり、手づく



第1図 亀岡北部の主要中世遺跡 (京都北西部 1/50,000 国土地理院)

くねしか出土しない遺跡や二つが共伴する遺跡がある。そこで、中世の亀岡盆地における土師器皿の構成を時期から探り、その中で糸切り底部の割合を見ていきたい。11世紀から13世紀までの土師器皿に限定して糸切り底を探すことで糸切り底の推移を検討できると考えている。そのため土師器皿がまとまって出土した調査をあげ、その内容を確認する。今回は亀岡盆地の北部について検討する。

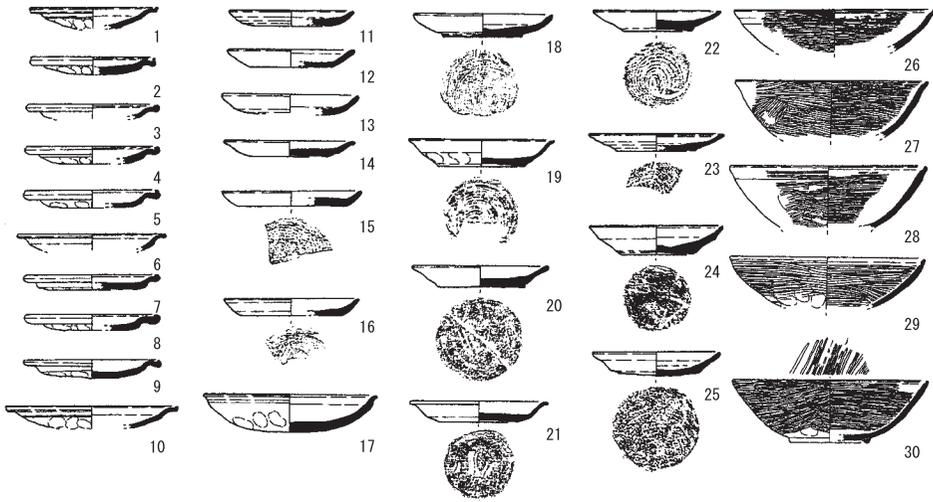
今回とりあげる遺跡は、池上遺跡、八木城跡、野条遺跡、出雲遺跡の4遺跡である。これらの遺跡では該当する時代の土師器皿とその共伴資料が一括資料として出土している。その他に里遺跡、山階遺跡、杉北遺跡からも少量ではあるが出土しているのでそちらについても少し触れたい。

2. 各遺跡の状況

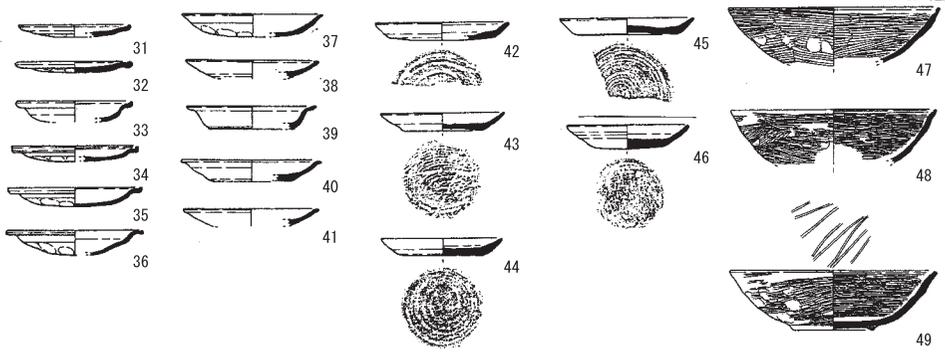
それでは各遺跡の出土状況を見ていきたい。出土数は土師器皿のみを数えているが共伴土器も必要があれば記述する。今回は糸切り底の存在とその割合をまとめた。また、下記の各遺跡の出土状況とその遺跡における糸切り皿の割合は表にもあらわした。

まず、池上遺跡である。その第5次調査では11世紀頃の資料がみついている。S E 270からは小皿35点中23点の糸切り底部を持つものが出土している。糸切り底でないものの中にての字状口縁の土師器皿があることから11世紀のものであると考えられる。井戸であるS E 270は埋土の中位で石が出土しており、その付近から出土したものを第2図ではS E 270上層とし、井戸の底から出土したものをS E 270下層とした。平安時代の土坑であるS K 271からは土師器皿が6点出土している。底部が確認できない1つを除いてすべて糸切り底部である。同じ土坑から黒色土器が出土していることからおよそ10世紀末から11世紀にかけて頃のものとして推測される。糸切り底の割合はS E 270で約65.7%でありS K 271はすべて糸切り底の土師器皿である。これを見ると土師器皿は糸切り底が主流であると言える。

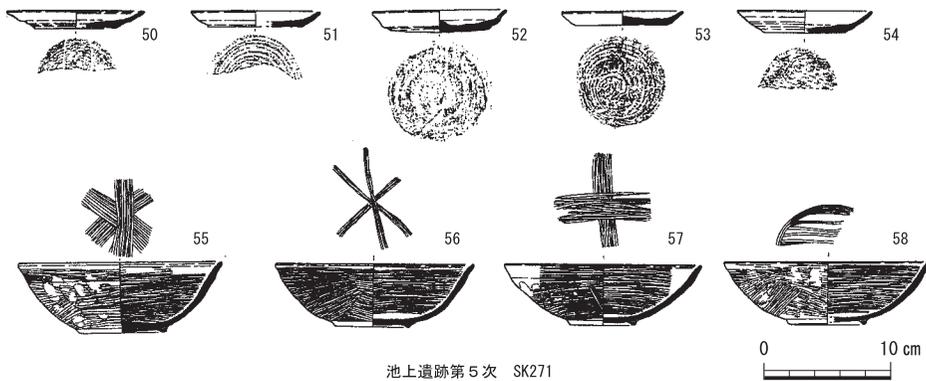
次に、八木城跡である。八木城跡は亀岡盆地の北西部、南丹市八木町にある内藤氏の居城であるが、その第2次・第3次調査で土師器皿が出土している。城郭の調査では16世紀以降の土師器皿が出土しているがここでは割愛する。同調査で発掘した城山の麓にある春日神社から11世紀頃の土師器皿が出ている。内訳は、二段ナデのものが8点、外反するものが3点、ての字状口縁のものが9点である。その中に糸切り底はない。二段ナデの器の時代を口径から11世紀後半ごろと推定し、大皿は口径11cm以上のものを数えたところ5点^(註1)あった。また、17世紀頃のものとして推定される土師器皿が24点と時期の記載はない糸切り底部の土師器皿が4点出ている。糸切り底の土師器皿の出土が12世紀になると減少しほぼ



池上遺跡第5次 SE270 上層

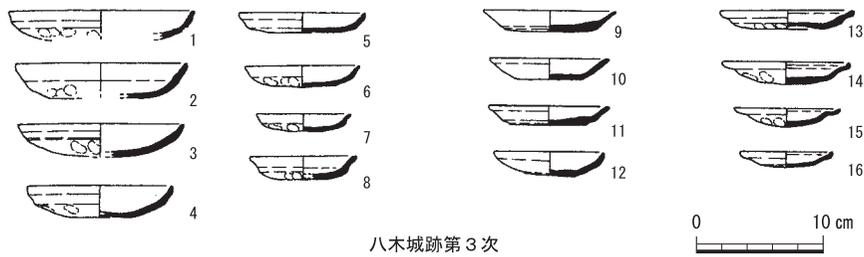


池上遺跡第5次 SE270 下層



池上遺跡第5次 SK271

第2図 池上遺跡第5次出土土師器と供伴資料

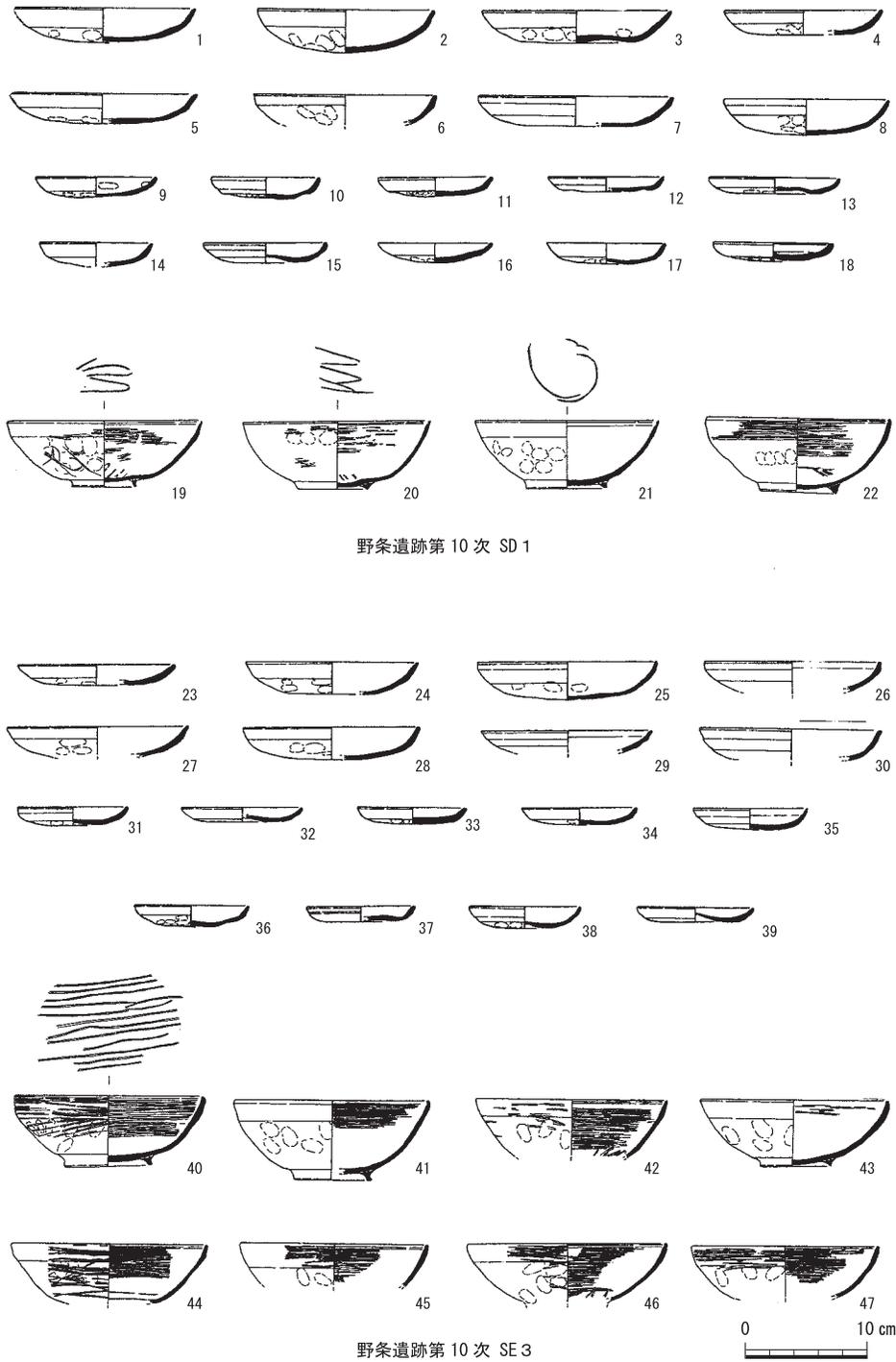


第3図 八木城跡第3次出土土師器

見られなくなることから、この時期記載のない糸切り底の土師器皿は同地点で出土した11世紀のものと同時代であると推測する。そうすると小皿だけで糸切り底の割合を数えると約21%であり、大皿も含めると16.6%である。

次に野条遺跡であるが、この遺跡は亀岡盆地北部、南丹市八木町にある遺跡である。平成17年度の第10次調査の範囲を平成18年度で拡張しており、連続した同一遺構が検出されているので出土遺物は二つの調査をあわせた数を掲載する。第10次調査ではS D 1から12世紀前半のものと考えられる土師器の大皿20点、小皿が23点出土している。S E 3からは12世紀中葉の大皿20点、小皿26点が出土した。このほかに11世紀後半～12世紀中葉ごろにかけてS X 49からも大皿1点、小皿3点、S D 201からはの字状口縁の土師器皿が1点出土している。これらの土師器皿に糸切り底はない。しかしS D 1の報告されていない細片587点を調べたところ糸切りの底部4点を確認した。S E 3でも同じく細片605点中に8点の糸切り底部のものを確認したので、糸切り底の土師器皿が全く存在しないということではない。しかし、存在するとしてもごく少量である。

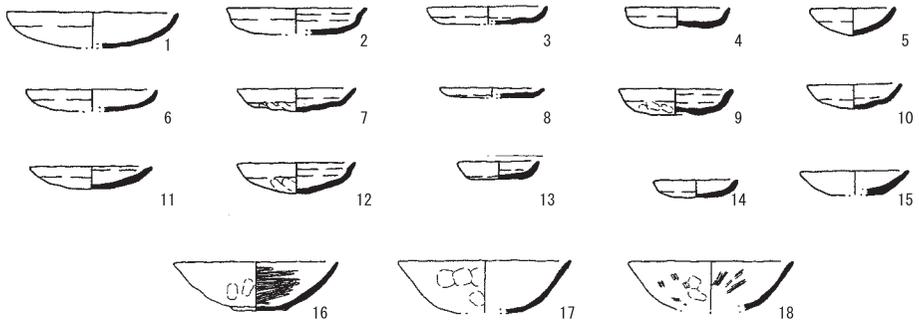
出雲遺跡は亀岡盆地内では北東の山際に位置する遺跡である。出雲遺跡の範囲内には丹波一の宮出雲大神宮が入っている。7次・8次、12次・14次調査で鎌倉時代の土師器皿が出土している。第7次調査では灰褐色砂礫土内から土師器皿と瓦器皿が合わせて8点出ている。その中に形状から糸切り底の特徴が窺えるものが2点存在する。これを割合で考えると25%になる。第8次調査ではS K 0801・S K 0803・S K 0804・S K 0814から土師器皿が出土している。S K 0801から22点の土師器皿が出土し瓦器碗が3点共伴している。瓦器碗から推測するに時代は13世紀後半頃と思われる。S K 0803には15点の土師器皿がある。それらと瓦器碗13点、瓦器皿2点などが折り重なるように出土しており、時期は土師器皿や瓦器碗から12世紀中頃と考えられる。糸切り底は見られない。S K 0804から9点12世紀後半ごろの土師器皿が出ている。S K 0814では大皿3点と小皿16点が出土しており、13世紀後半～14世紀初頭とみられる。図面から判断したところS K 0801に1点とS K 0804に2点糸切り底の特徴が見える土師器皿が存在する。(第5図15、35、36) S K 0801



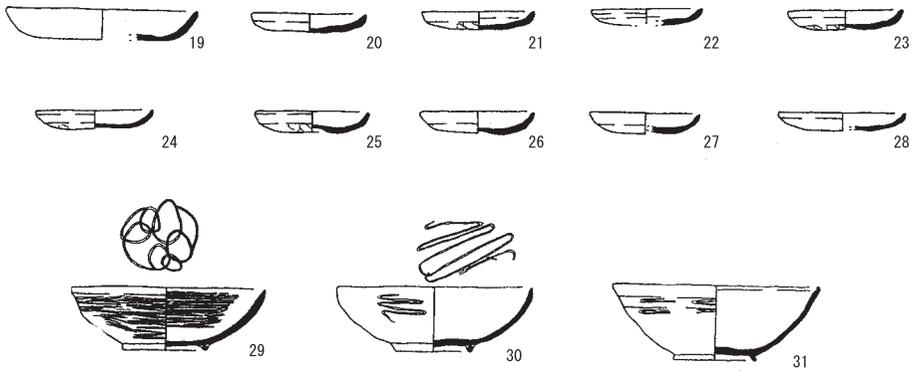
野条遺跡第10次 SD 1

野条遺跡第10次 SE 3

第4図 野条遺跡第10次出土土師器と供伴資料



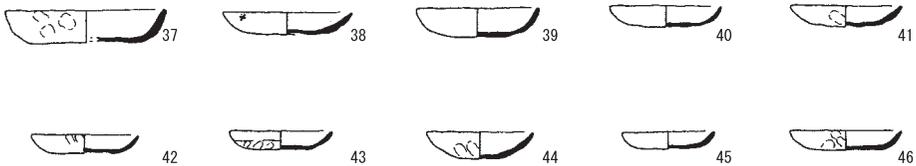
出雲遺跡第8次 SK0801



出雲遺跡第8次 SK0803



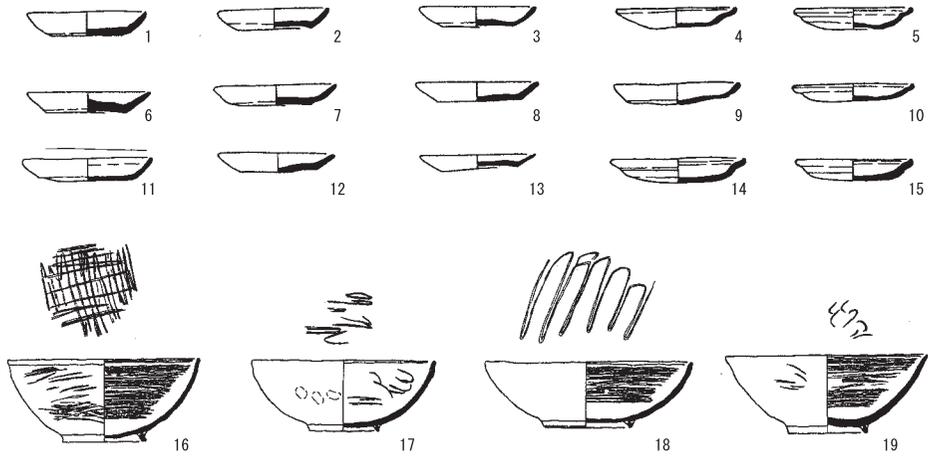
出雲遺跡第8次 SK0804 出土土師器



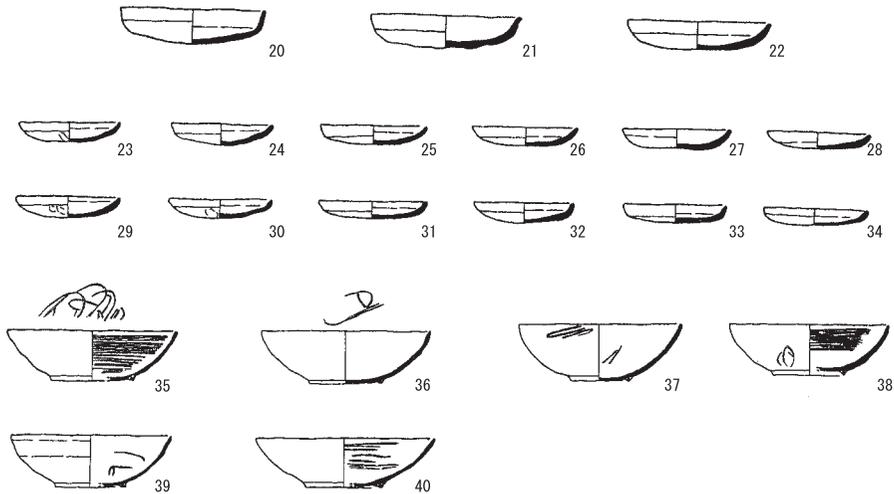
出雲遺跡第8次 SK0814 出土土師器



第5図 出雲遺跡第8次出土土師器と供伴資料



出雲遺跡第12次 SK1201



出雲遺跡 SK1205



第6図 出雲遺跡第12次出土土師器と供伴資料

の糸切り底の割合は小皿だけで5%、大皿を含めると約4.5%になる。SK0804は母数が少ないので糸切り底の割合は22.2%になる。第12次調査ではSK1201から小皿24点と大皿1点が出土し、そのうち小皿4点が糸切り底である。共伴する瓦器碗が12世紀前半から半ばごろを示しているが、土師器皿には11世紀末頃のものも含まれる。また図面上から判断して糸切り底の特徴を持つ土師器皿が3点ほど存在する。(第6図6・7・

8) 割合にしてみると12%である。SK1205からは小皿14点、大皿3点が出ている。第14次調査ではSK1403から小皿が5点、SK406から小皿が12点、大皿が4点出土している。13世紀頃と推測される。いずれも糸切り底は確認されない。

このほかに、杉北遺跡第7次のSB05からは小皿が3点、SB06からは小皿1点、SB07からは小皿が5点出土している。鎌倉・室町時代の土師器皿である。里遺跡第4次調査では13世紀前後の小皿5点と大皿2点が出ており、山階遺跡第2次調査では鎌倉時代の皿が2点、小皿が2点と大皿が1点出土している。

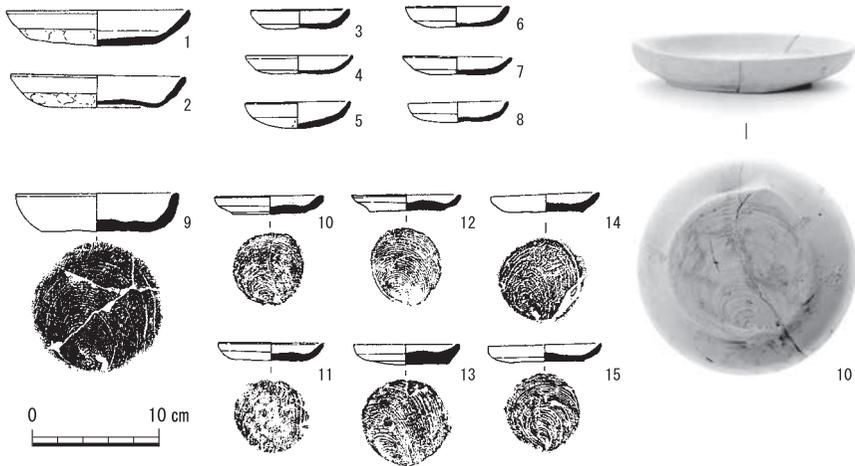
いずれの遺跡も糸切り底の土師器皿は見られない。

まとめ

以上亀岡盆地北部での土師器皿の出土状況をまとめた。池上遺跡の10世紀末から11世紀にかけての資料では、一つの遺跡の中ではあるが70%近くを占めた糸切り底の土師器皿が亀岡盆地内の主流になっていたと考えられる。しかし八木城の11世紀末頃の資料ではその割合を21%に落とし数が激減しているのがわかる。また12世紀前半～半ばの出雲遺跡第12次SK1201では3点で12%、12世紀前半の野条遺跡の遺構では少数の細片しか存在しないことから12世紀以降にかけてほぼ横ばいか減少傾向にあり、再び主流になることはない。つまり11世紀と12世紀の間に土師器皿の大きな転機が見られる。綾部市の味方遺跡では11世紀後半～12世紀においても糸切り底が主流である。^(注2)丹波地域の中でも味方遺跡は丹後地域寄りの組成であると言える。同じ丹波地域でも北部と南部では様相が異なること

付表 てづくね・糸切り点数表

遺跡名	遺構	器形	点数	糸切り	割合	時期
池上遺跡	SE270	小皿	35	23	約 65.7%	10 世紀末～11 世紀頃
	SK271	小皿	6	6	100%	10 世紀末～11 世紀頃
八木城跡 (春日神社跡)	春日神社 調査区	大皿	5	0	21%	11 世紀頃
		小皿	19	4		
野条遺跡	SD1	大皿	20	0	0.60%	12 世紀前半
		小皿	23	0		
		破片	587	4		
	SE3	大皿	20	0	1.3%	12 世紀中頃
		小皿	26	0		
		破片	605	8		
出雲遺跡 (第7次)	A 地区・ 第2トレ ンチ	皿	8	3	25%	鎌倉時代前期
出雲遺跡 (第8次)	SK0801	大皿	2	0	5%	13 世紀前半頃
		小皿	20	1		
	SK0803	大皿	1	0		12 世紀中頃
		小皿	15	0		
	SK0804	小皿	9	2	22.2%	12 世紀後半
	SK0814	大皿	3	0		13 世紀後半～ 14 世紀
小皿		16	0			
出雲遺跡 (第12次)	SK1201	小皿	25	3	12%	12 世紀前半～ 半ば
		小皿	14	0		13 世紀
	大皿	3	0			
出雲遺跡 (第14次)	SK1403	小皿	5	0		鎌倉時代前期
		小皿	12	0		
	SK1406	大皿	4	0		鎌倉時代前期



出雲遺跡第16次SD3

第7図 出雲遺跡第8次出土土師器と供伴資料

が確認できる。今回触れられなかった亀岡盆地南部の遺跡においても同様の傾向が見られると考えているので検討を進めたい。また、11世紀末～12世紀にかけて亀岡盆地に糸切り底の皿が減るということは手づくねの土師器皿の割合が増えるということなので都との関係も探っていきたい。

最後に、出雲遺跡の最新の発掘成果を紹介したい。第16次調査において12世紀後半の溝SD3から糸切り底の土師器皿が多数出土している。その割合は土師器皿の出土量の約25%になる。以前の出雲遺跡の調査でも割合が20%をこえる遺構はあったが、第16次調査は総点数が千をこえる資料の割合なのでその多量さは特異といえる。12世紀になると減少するはずの土師器皿が多数出土するというのは今までの傾向とは違う例であるといえるだろう。この特異性がどのような要因によるものなのか今後の検討課題である。

(たけもと・のりこ＝当調査研究センター調査課調査員)

注1 伊野近富「かわらけ考」(『埋蔵文化財論集』第1集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987

注2 松尾史子「古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討(上)(2.日本海沿岸地域における土器様相についてb.北近畿地方)」『京都府埋蔵文化財情報』第93号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2004

参考文献

- 伊野近富「大内城跡（第2章 第6節 考察）」（『京都府遺跡調査報告書』第3冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984
- 黒坪一樹ほか「出雲遺跡第15・16・18次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第166冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2015
- 戸原和人「府営ほ場整備事業（三俣地区）関係遺跡発掘調査概要 杉北遺跡第7次」（『京都府遺跡調査概報』第103冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2002
- 中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第91冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2000
- 中澤勝「府営ほ場整備事業関連遺跡発掘調査－里遺跡第4次発掘調査・山階遺跡第2次発掘調査－」（『亀岡市文化財調査報告書』第63集 亀岡市教育委員会）2003
- 中澤勝「平成17・18年度国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査報告書－蔵垣内遺跡・出雲遺跡（中古墳群）－ 出雲遺跡第7次・出雲遺跡（中古墳群）第8次発掘調査」（『市内遺跡発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第76集 亀岡市教育委員会）2008
- 中澤勝「平成17・18年度国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査報告書－蔵垣内遺跡・出雲遺跡（中古墳群）－ 第9次発掘調査」（『市内遺跡発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第76集 亀岡市教育委員会）2008
- 中澤勝「国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査報告書 出雲遺跡第14次発掘調査」（『亀岡市文化財調査報告書』第78集 亀岡市教育委員会）2009
- 橋本久和「瓦器碗の編年と年代観」（『中世考古学と地域・流通 瓦器碗からみる』 中世土器研究会）2009
- 引原茂治「国道478バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要 八木城跡第2・3次」（『京都府遺跡調査概報』第62冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1995